

鷹の目の狩人

XI

印刷に魅せられて

しろはく古地図と城の博物館富原文庫

代表 富原 道晴

学生時代、関西で創設された城郭研究会の機関誌編集長や代表を務めていた。いわゆるガリ版[※]で、仲間が集まり、徹夜で機関誌を作成した。若いというか、火の玉のような情熱を持ち、あらゆることに挑戦した。会員数も一般の賛助会員を含めて130余名と盛況であった。(※ガリ版の詳細は、岐阜の大東化工(株)さんの謄写版資料館で)

若い名もなき私たちを支えてくれたのが、当時、時代を代表する城郭研究者であった。個人では近付くこともできない大御所の人たちに出会えたのは、印刷物である機関紙『城春』であった。この時の経験が、のちに、インキメーカーに就職し、印刷文化に携わることとなり、一企業ではできない業界活動の重要性を知ることとなった。個人も企業も業界も栄えなければならぬ。たとえライバルであっても共通の利害は存在するはずであり、利害を超えた大義があると信じていた。

インキ会社の営業時代も常に顧客を見ていた。段ボールの縦通しという印刷機が、当時、北陸に80台近くあり、印刷の版交換は厚紙にゴム版を張り、ドライバーとビスで交換していた。これを鉄のシリンダーに強力ゴム磁石を巻き、マグネットシリンダーに変換し、印版はスチールペーパーという0.1mmの鉄板に貼り付け、磁力でワンタッチ交換を実現、ほぼすべての印刷機を改造した。売り上げは磁石代のみで何の業績にもならなかったが、業界の生産性は改善した。

段ボールの網点印刷を行う高精度印刷機が海外から初めて入ってきた頃、ただし、高精細といっても今では

当たり前のインチ250線程度だが、当時は紙粉対策を考慮していない段ボール工場で印刷したものであるため、ベタ面のインキは紙粉によって抜けただけになり、製品にならない。ガムテー

プで、印刷前の段ボールの紙粉を取っていた。それを見て、製版室の入口のごみ取りマットを思い出した。3mmの薄いものを製造、段ボール印刷用の印版貼込フィルムに巻き付け、印刷機の第一胴に巻いて、段ボールの紙粉を除去して印刷した。

— んなわけで、いつのまにか東京で開発を担当することとなった。といっても出身が文化系、技術の知識があるわけではない。ただ、いつも工場の中をくまなく歩き、工場の改善点を模索し、紹介させていただいた。段ボール印刷の大きな転機はバーコード印刷であった。100 μ m以上の凹凸のある段ボールシートに、 μ m単位の精度を要求されるバーコード印刷などできるわけがないという大勢の意見、できないという説明はいくらでも行えるが、産業界のバーコードが時代を変える、経営指標となるという要請は避けられなかった。段ボール工場の技術スタッフと実験を繰り返し、理論の習得、印刷方法の確立、印刷されたバーコードが使えるという保証、やらねば取り残されるという危機感の方が強かった。結果、業界人の努力により、目的は達成された。年間150回に及ぶ全国での講習会は夢の又夢である。これは後に、グラビア業界がVOC対策に対応する際に自分の指標となった。

段ボールでは印刷以外の加工技術でも、多くの技術開発を行った。腱鞘炎を起こされていた見本作成にはCAD、CAMによるサンプルカッターを国内に導入し、工場内物流として、版や木型の天井搬送、段ボールシートの自動搬送、印版の自動洗浄、印刷指示書の自動出し入れと、あらゆることを立ち上げた。

印刷への憧れ、現場での経験、業界の未来を見つめること。42年3カ月の挑戦的な日々は今も継続している。



江戸時代の兵法書に見る木版印刷



▲1589年、関ヶ原の戦い以前の銅版印刷、美しい太平洋地図

同図の一部、日本地図▶



CONVERTECH CONVERTECH CONVERTECH CONVERTECH CONVERTECH CONVERTECH CONVERTECH CONVERTECH CONVERTECH